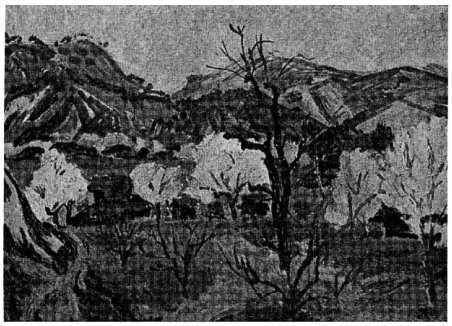
新制作

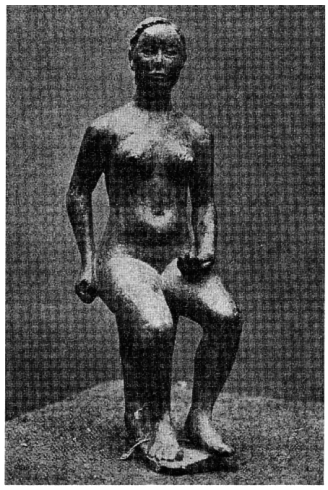
会報 No.50
発行
2005年12月15日
編集・発行人
高 津 鐵 朗

発行　新制作協会　〒110-0013 東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202　Tel.03-5603-8350　Fax.03-5603-8360
http://www.shinseisaku.jp/

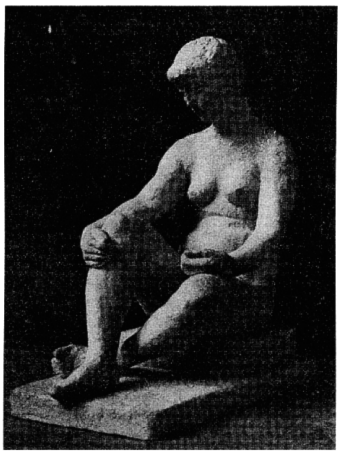
▲舞妓／内田 巌



▲春／三田 康

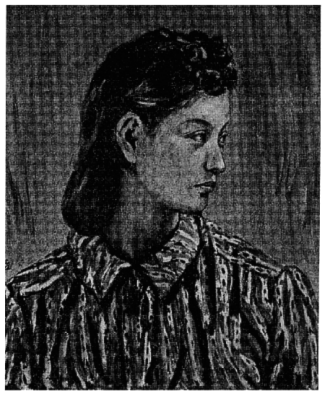


腰掛けた女／早川巍一郎▶



◀坐像／佐藤忠良

▶子供／伊勢正義



▶少女／佐藤 敬

『兵士へ贈る畫集』(陸軍報道部監修・1944年刊行)より

第69回新制作展 新会員・受賞者紹介

新会員

絵画部

阿曽沼 明

◆初入選で懇親会に出席した時、自分の作品が恥ずかしくて大きな身体を壁に張り付け小さくなっていました。今日、壁から離れることが出来たのは、作品に挑戦する心と力を教えて下さった諸先生方、そして挑む者を受け入れて拒まない新制作展の賜です。会員という新たな出発点に立ち、作品の不安と迷いに更なる信念と勇気をもって挑戦していきます。

◆一九六三年広島県生まれ。一九九〇年和光大学人文学部芸術学科卒業。一九九〇年第54回新制作展初入選。第65回、68回新制作展新作家賞受賞。

小林 昭子

◆四十数年の長い間何度か挫折を繰返しながら今日までの年月を思いますと、自分だけではとても続けてこられなかったと思います。

いつからか、中世の街々を歩きながらその魅力にひかれ描き続けてきました。多くの方から御指導頂いたこと、心にとめて、どこまでやれるか挑戦したいと思っています。

◆一九二七年東京都生まれ。一九六〇年第24回新制作展初入選。第34回新制作展新作家賞受賞。

千葉 文隆

◆まさか?と思いました。ずいぶん長くかかったものです。小生が最長かも知れませんが、これからは、会員の名に恥じないよう頑張りたいものです。

色、形、空間、そして絵画としての内容など、何とかならないか—と毎日悪戦苦闘—閃きでもあれば良いのですが、そんなことも期待できそうもありませんから、ただ、ひたすら、自分の内にあるかも知れないもの—に期待して、せっせと描きたいものです。

◆一九四一年岩手県生まれ。一九六八年東京芸術大学油画科卒業。一九七〇年第34回新制作展初出品。第64回、65回新制作展新作家賞受賞。

沼本 秀昭

◆精一杯描いたものの、自分の中に確かな手応えがなく不安を感じていた時、ある方から「絵だけじゃなく、作者の姿勢も見ているんだよ。作家を育てようとしているんじゃないかな」との言葉を頂きました。大きな励みと勇気になりました。そうした中での、今度の会員推挙。作家としての自覚に立ち、益々精進していきたいと思っています。誠にありがとうございました。

◆一九七三年広島県生まれ。二〇〇〇年広島市立大学大学院研究科修了。一九九七年第61回新制作展初入選。第66回、67回、68回新制作展新作家賞受賞。

渡辺 久子

◆筒井先生の指導の下、初めて新制作に出品して落選したのは、三十数年前でした。振り返りたくはない少し長い年月が新制作の中では形として残っています。私の中でこうしてつながった形があることを、今回考えさせられました。大切にしたいと思います。会員推挙、ありがとうございました。

◆一九五二年岐阜県生まれ。一九七五年第39回新制作展初入選。第60回、64回、68回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部

奥田 真澄

◆この度は会員に推挙して頂きありがとうございました。私は大学で教わっていた先生や先輩方の影響で出品を始めました。発表を重ねるに従って、多くの人達と知り合い、そして作品を見てもらうことが出来ました。そのことが、自分の作品を冷静に見直す良いきっかけになったと思っています。これからより一層頑張って作品を造っていきたいと思いますので、御指導の程よろしくお願いします。

◆一九七一年奈良県生まれ。二〇〇〇年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程彫刻専攻退学。一九九七年第61回新制作展初入選。第64回、67回、68回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部

岡本 泰子

◆大学という環境から離れ、自分が毎年創り続けるためのペースメーカーとしての場を求めていたとき、新制作展と出会いました。出来不出来はともかく、これ

がその時の正直な姿と割り切っていた頃もありましたが、これからは心引き締めて会員としての自覚を持たなければと感じています。日々呼吸をするようなおおらかな作品制作を目標にしております。

◆一九六七年東京都生まれ。一九九二年東京芸術大学大学院修了。一九九五年第59回新制作展初出品初入選。第61回、65回新制作展新作家賞受賞。

下山（しもやま） 肇（はじめ）

◆「不可能」とは、自らの力で世界を切り拓くことを放棄した、臆病者の言葉だ。

「不可能」とは、現状に甘んじるためのいい訳にすぎない。

「不可能」とは、事実ですらなく、単なる先入観だ。

「不可能」とは、誰かに決めつけられることではない。

「不可能」とは、通過点だ。

「不可能」とは、可能性だ。

「不可能」なんて、ありえない。

impossible is nothing.

◆一九七〇年神奈川県生まれ。一九九三年東京造形大学デザイン学科研究生修了。一九九一年第55回新制作展初入選。第66回、68回新制作展新作家賞受賞。

新作家賞

絵画部

秋葉直樹（福島）　一居弘美（滋賀）
勝あらた（東京）　小浪春枝（東京）
菅沼光児（埼玉）　曽根三千代（香川）
竹内一（東京）　中村修二（山梨）
松木正代（神奈川）　松木義三（北海道）

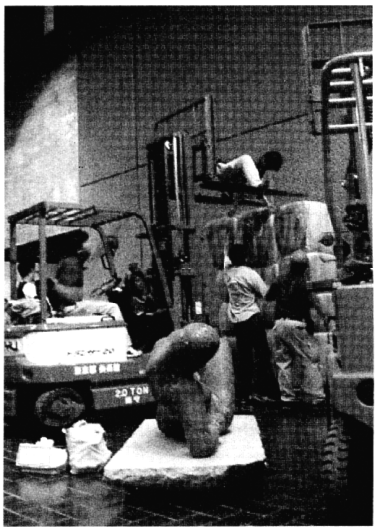
彫刻部

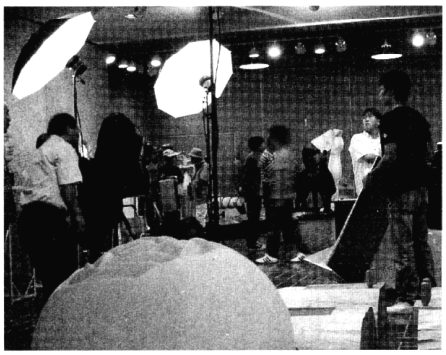
大野春夫（群馬）　小川誠（北海道）
木方立樹（愛知）　菅原英雄（埼玉）
福本紀孝（岡山）　吉賀伸（山口）

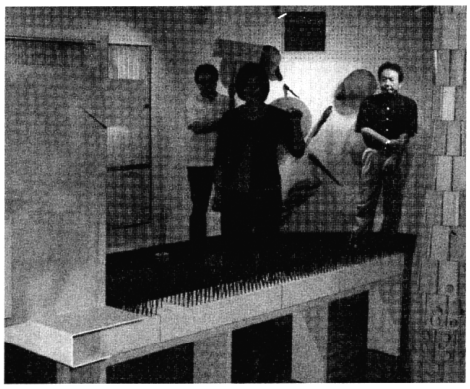
スペースデザイン部

岡あやこ（東京）　野倉勝治（千葉）
山本景子（青森）

69回展点描







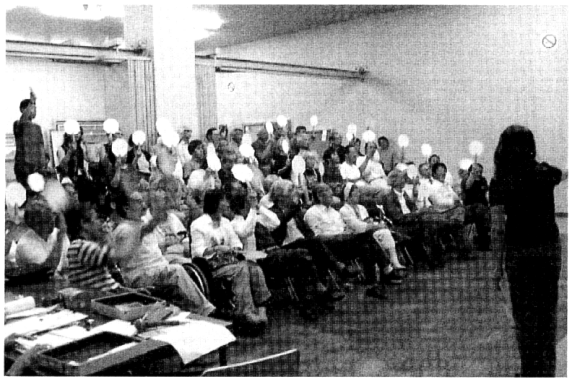
審査・陳列

●絵画部審査・陳列　　丹羽和子

第69回展の審査委員長を戸惑いの中でどうにか無事終える。今年は応募作品数も、入選作品点数も多かった。

短時間のうちに作品の優劣を決めるのは、実に困難なことだ。限られた時間内、多数決というシステムに、私個人として心の中にわだかまる疑問は拭い切れない。

エネルギッシュな大作、新鮮な表現の作品が姿を消してゆくのは、私たち審査する者にとって辛い一瞬だ。だが――かつて審査の時に「ホーッ」と声にならない空気に満たされる作品に出会ったが、今年はそんな瞬間に出会わなかったような気がする。平均してうまくまとまった作品が多かったようだ。



もう一つ、女性の作品にパワーのあるものが多かったように思えるのは身びいきのせいだろうか？

本来、芸術作品は自由な発想、自由な表現であるべきなのに、美術館という枠の中では大きさは制限される。審査の時間も制限される。致し方ない。ついでに重さも制限しては……と陳列の時につい考えてしまった。会員も年々高齢化を避けられない。

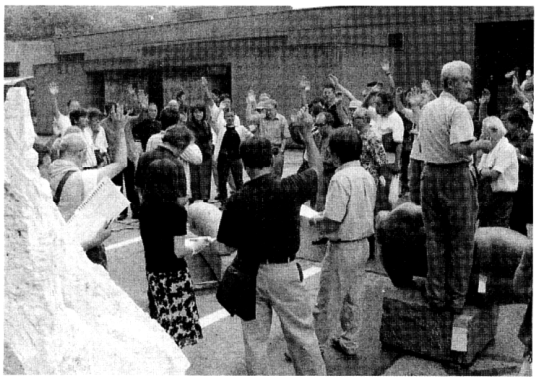
来年は70周年記念展、次はナショナルギャラリーに移ることになり、経済的負担が大きくなることは確かだ。ある会員は経済効率を考えた運営を考え、ある会員はもっと純粋に展覧会の質を考えるべきだとの発言。どちらも重要なことであり、それぞれ重みのある意見だ。

私はその発言を聞きながら、私たちを取り巻くすべてが変革の時であることは避けられないという感を深くした。

（絵画部会員）

●彫刻部審査報告　　細谷泰茲

第69回新制作展彫刻部の搬入点数一八三点、搬入者一一七名の審査が、9月5、6日、東京都美術館地下1階で行われ、入選一〇一点、入選者九七名、初入選者一七名、一九点であった。彫刻作品を出品するには（特に遠方から）ひとかたならぬ苦労がある。材質、大きさ、重量を含め、それは宿命的なことであるが、それにも関わらず出品を続ける情熱は息吹となってそのまま作品に刻み込まれ、二十年余にわたる出品者も数名いる。



彫刻部の審査方法は、A（入選）、C（落選）を出席会員過半数の挙手によって決定していく。B（保留）がないということは、当然のことながら審査に真剣さが加わる。また、彫刻部の審査方法に特有なこととして、落選した作品であっても会員の強い支持があれば、C′として全作品審査終了後に改めて再審査できるリベラルな内規があり、今年度は二点のC′が再審査された。

美術は、作品とそれをみる人とによって成り立っている。それ故、殊更に作品を印象づけようとするあまり奇妙な形態だけとなってしまうことが間々ある。なかなか発想だけでは作品化することは難しい。一見地味にみえる作品であっても自らの彫刻観にもとづいて表現されているもの、堅実な技法とねばり強く制作を続けた作品には、一切の言い訳を排除してしまう強固なものがある。

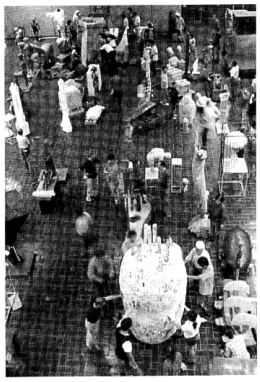
彫刻では、作品の大きさは魅力の一つである。出品規定を最大限考慮した大作は強烈なエネルギーを発散し、素材とともに独自の表現方法とが相俟って新鮮な空間を表出している。

彫刻部の充実には、若い会員の実験的試み、意欲を欠くことはできない。そこに一般出品者の熱意が加わって更に発展

していくと思われる。

審査会場は厳粛な空気を醸し、緊張感に満ちていた。

（彫刻部会員）



●スペースデザイン部審査報告

藤原郁三

例年なみの応募点数だが、若干立体作品の方が増えているようである。

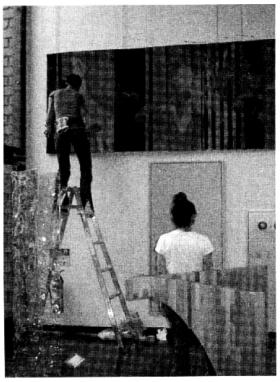
ここ近年の傾向だが、自然素材の作品が多くなってきたようだ。そのこと自体は好ましいことではあるが、やはり全体的に地味な感じがする。

作品内容もレベルが安定してきて、甲乙つけがたく安心して見られるのだが、その分作品のインパクトが弱くなってきているように感じる。少し、破綻しても良いからドギモを抜くような迫力満点の作品を望みたい。作品の完成度が上がってきているのは良い傾向だが、全体に小ぶりの作品になってくるのでは展覧会として面白みに欠けるし、ひいては団体展の減少傾向に歯止めをかけることにも繋がらないと思うからだ。

しかし、立体と平面の区別がつかない境界領域の作品が少し増えてきているのは、スペースデザインの独自性が発揮できて良い傾向だと思う。

また、毎年初出品者が多いにもかかわらず、出品総数が横ばいというのは、継続して出品する人が少ないということで問題だ。継続出品を促すためにも、作品の質の向上を目指し、いかに魅力ある展覧会にしていくかがこれからの課題だと思う。

（SD部会員）



Gallery Talk

●絵画部

年々、人気の出てきたギャラリートークは、始まる少し前からそれらしい人影が増えてきた。何回も出品し、どうすればもっとよい絵が描けるのか研究と努力を重ねてきた人達だ。

会員は絵画部室に集まり、それぞれ自分の作品のある階を受け持つことを確認する。私の担当だったF1についていうと、メンバーは、高津・赤穴・糸田・張替・名柄・荒井・間中・亀本。

「会員は自作品についての内容説明、技法解説をします。一般の方は自分の作品の前に来たら声をかけて、作品の紹介、苦労した所、聴きたいことなど言って下さい。では始めましょうか」と高津さん。会員の方々も、ちょっと若返った高揚した様子で丁寧にアドバイス。自作品について、各自、次のような感想を述べた。

〔赤穴〕この作品は真中から右に延びた赤い太い線から始まった。描き出すと止まらない、どんどん描いてしまう。止めるタイミングも大事です。

〔糸田〕〈紙に描いてあるということで質問多数〉今の気持ちをどう表現するか。失敗したと思っても、そこからまた新しい発見に繋がる。悪戯っぽい遊びも入っていて、私は楽しんでいる。

〔張替〕この樹はゴッホのそれのように、うねりをもって天に向っていた。抽象も具象もなく、木の生命力を描きたい。

〔名柄〕この犬は、よく吠える犬だがいつも私の傍にいる。私の絵の夢を見ているのかもしれない。

〔荒井〕いつもビニール袋を持って、ゴミモチーフを集めて廻っている。この作品は鍬の錆びた色がおもしろかった。ブリキの青錆の重なりも美しいと思った。

〔高津〕色を塗ってから線を描いている。線と面との分離を考えて描いている。

〔亀本〕何年も前から描きたいと思っていた二ケを描いた。青く深い大海原を進む二ケ、風に乱れる裳裾の表現に苦労した。

会員の自作品についてのコメントは、非常に内容が深く、考えさせられるものが多い。新制作協会生誕の精神は七十年

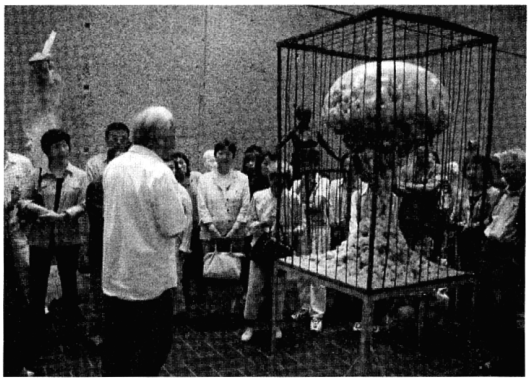
脈々と受け継がれていることを感じた。
一般出品者も、よいアドバイスを受け、もっと深い思考、もっと多くの疑問をもつことが出来、実り多い午後だったと思う。

（亀本信子）

●彫刻部

62回展から始まったギャラリートークの企画も8回目となり、企画の是非も問われながらも、ともかく担当、中垣・渡辺で始まりました。事前に中垣氏と話し合ったことは、一般の来場者に向かい美術をわかりやすく、楽しみながら観賞することの手助けをすること。今まで大と小の会場に分かれて行いましたが、今回は一組のグループで行うこととしました。

初頭で、中垣氏が上野公園周辺の歴史を、縄文、弥生、古墳から近代までの遺跡、史跡から話し、私は新制作展の日本の歴史上の位置や、現在に至る過程などを話しました。作品の説明は制作者自身がすることを基本とし、大彫刻室では中垣氏、北郷氏、橋本氏、平山氏、大田女史、田村興造氏、石川氏、高橋米氏、大野晴夫氏、高橋枡旺氏等に説明していただき、作者不在の抽象作品、実材作品では私の独断で選択し説明しました。後日、本人に確かめましたが良しということでホッとしました。小の会場に移り、滝氏、本多悦久氏、山県氏、五十嵐氏、中島氏、日比野氏等に自作を、加藤氏に自作と故土谷氏の作品の説明をしていただきました。来場者の方々は、前列はかがんで幾重にも作者・作品を囲み、興味をもって聞いていました。



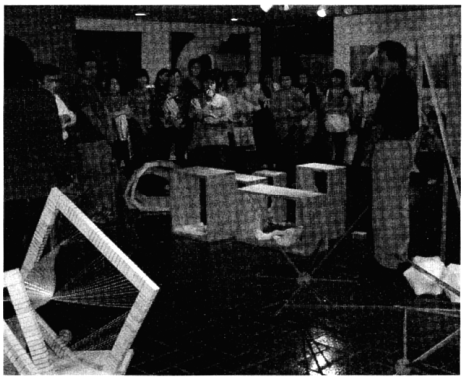
それぞれの方が充実した説明をされたので予定時間となり、中垣氏が佐藤忠良氏の作品を紹介して終えました。

後日、来場者の方から大変面白かった由のことを伝え聞き、うれしく思っています。

（渡辺隆根）

●スペースデザイン部

スペースデザイン部のギャラリートークは50～60名の参加者を得て行われた。昨年に引き続き、降旗・西村の二名が進行役を務めた。今回はテーマを「スペースデザインの独自性とは何か」とし、作品解説に加えてテーマに関する考えを出品者に語ってもらった。出品者が作品のコンセプトやテーマについての思いを語った後、参加者からの質問に答えるというかたちで進められた。終始なごやかな雰囲気の中で展開され、充実した2時間であった。



作品に関して受賞した岡あやこさんは、今回はこれまでとは違ってあまり「かたち」にはこだわらずに、素材の特性・特質を素直に出してみようと考えたが、その結果、素材についての新しい発見があり、また素材を生かした「かたち」も立ち現れてきたと語っている。そうした素材と作品との独特な関係性もスペースデザインの特徴であることを再認識した。会員からは、鑑賞者が見るだけでなく作品に直接関わることによって新たな空間や出来事が生れるというインタラクティブな側面や、個人的な制作のプロセスで複数の人間が関わることが特別なことでないこともスペースデザインの特徴であるという考えなどが出された。

（西村俊夫）

コラム こらむ

五年ぶりに

蛭田　均

文化庁から研修員として留学して以来、久しぶりにフランスにスケッチ旅行で訪れることになった。慌ただしく、ノルマンディーからパリへと、一週間程の滞在だったが、変わらないと感じることが多く、様々思いが蘇った。当時住んでいたアパルトマン。向かいにはカフェ・ラ・ロトンド、ラ・クーポールなど、その大通りは、どの店も丁寧に手入れが行き届き抜け目がない印象。が、ふと変わったことと言えば、自転車に乗った人が増えたことだろうか。（日本とは比較にならないが）

前回、行けずに気になっていたレザンドリーでは、スケッチをしながら、ゆったりとした河の流れ、時間と共に変化する光、その自然が織り成す美しさに静かな感動があった。実はその頃、日本では、フランス暴動のニュースでちょっとした騒ぎになっているようだった。フランスでは、まだ大したニュースにはなっていなかったが、日本では日増しに暴動が広がっていた様子を放映していたと後で聞いて驚いた。たまたま泊まっていたホテルがレピュブリック広場にあり、夜中に騒がしかったのはその集会で、また、車が何台か放火されていたというのを後で知った。その時は、「昨夜は騒がしかったなぁ。若い人たちが何かしてたのかな…」と、朝食をとりながら呑気に話をしていたのだから。そんな中、子供をよく連れて遊びに行ったリュクサンブール公園は、子供たちの賑やかな声の中、相変わらずのんびりとした空気で皆が生活の合間のひとときを楽しんでいるように見え、我々旅行者には見えない燻った社会が今回の暴動へと駆り立ててしまったというギャップ。只々平穏なフランスに、と願ってしまうのです。（絵画部会員）

九月のポーランド

武藤　岩雄

バカンスが終わる頃、バルト海沿岸のリゾート地ウエーバーという街に行った。二週間そこのホテルに滞在して絵を描いて、最終日にそこのホールで展覧会を開いてもらった。集まった画家たちと市長さん、土地の人たち、近所の美術館の館長さん、メディアの人と親交を持つという企画だった。ポーランドには土地の有力者が芸術家を招いてそこで制作をしてもらって展覧会を開く、という伝統があってそのことをプレネールと言っていた。他にもリトアニアの国境近くの街とワルシャワ近くの街にプレネールがあると言っていた。まだ他にもあるかもしれない。我々のようなサロンはないそうで、画家たちが自主的に組織するサークルのようなものもなく、各自が自由に制作しているそうだ。

私と相部屋だったのはタデウス・ソルヴィヤックという名前のポーランドの画家で、怪奇的な絵を描く有名な人だと聞いた。画集が出ていてプレゼントされた。食事と部屋代は提供されるので心配はなかったが、やはりお互いある年齢になっているので相部屋はちょっときつい。やりとりは拙い仏語と英語。反省会は毎晩のようにあって、十数名が廊下のホールに集まりウオッカをあおり気勢をあげ、絵描きは世界中同じだと思った。国籍はポーランド、リトアニア、ウクライナ、ロシア、フランス、ドイツ、そして日本。朝はホテルの前の広大な松林をぬけ、真っ白な砂浜のあるバルト海ビーチを散歩するのが日課だった。

毎日のホテルの食事はとてもおいしく、これでいい絵が出来なければ申し訳ないと思い頑張った。最終日は隣接するホールで土地の名士を招き展覧会を開いてもらい夜遅くまで騒いだ。日本の歌を歌わされ、若山牧水の歌詞の歌を歌った。翌日はグダニスクに泊まり、国立美術館でメムリンクの祭壇画を見て運河を見物してホテルに戻ったが、連帯の記念碑とドイツ軍の上陸に抵抗したポーランド守備隊の記念碑を見られなかったのが心残りだった。（絵画部会員）

昭和十九年 新制作画集

小野　かおる

今、私の目の前に9センチ×13センチの一冊の画集がある。

「兵士へ贈る畫集」陸軍報道部監修、である。あげは蝶の表紙は、小磯良平。新制作のマーク入りである。

昭和十九年末に刊行されたこの本は、終戦後間もなく他界した父からもらったもの。父は美術家ではなかったので、どなたからどうしていただいたのかはわからないが、六十年来の宝物である。

陸軍報道部のY中尉は、この時期になぜ新制作の画集をつくろうと思われたの

か？　序文の中で、美術も戦いの手段である……というような文言を書いておられるが、その本は「戦陣訓」ではじまり、「葉隠」に続く。

昭和十九年末日発行の画集は、昭和十九年現在会員だった絵画・彫刻の皆さんが二枚ずつ、絵画はカラーで、彫刻は作品の写真をモノクロで掲載されている。

裸婦坐像
菊地一雄

テーマは、女性・日本の風景・花・子供・動物。彫刻は裸婦が多く、少女の首・動物である。「戦意昂揚」と見られる作品は一枚もない。終りにスケッチ用の白紙が四枚とじられている。

終戦が八ヶ月余に迫った時に、美術出版から出されたポケットサイズのこの画集が、どうやって兵士の手に渡ったのか。国内も戦場と化していたこの時期に、国を離れ、辺境の地にあった兵士の胸を暖めることができたのだろうか。スケッチをする時もなければ、鉛筆もなかったのではないか。この本を見ていると、六十年前、美術をもって平和を呼ぶ絶叫に近い声が聞こえてくる。

今、現在、平和とは名ばかりの時、私達は何をすべきか考えなくてはならない時が来ているのではないだろうか。

（敬称略）（SD部会員）

＊受賞作家展＊

69回展新作家賞受賞者による受賞作家展を左記のとおり開催いたします。開催初日にはオープニングパーティーも行います。皆さまのお出でをお待ちします。

絵画部

■会　期　06年1月16日(月)～26日(木)
■会　場　ごらくギャラリー
☎03－3571－3706

彫刻部

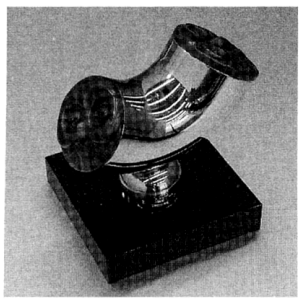
■会　期　06年2月20日(月)～3月4日(土)
■会　場　ギャラリーせいほう
☎03－3573－2468

スペースデザイン部

■会　期　06年2月19日(日)～25日(土)
■会　場　画廊るたん
☎03－3541－0522

ひととき

69回展の新作家賞の賞牌は、スペースデザイン部の小野かおる氏に制作を依頼しました。



「ふくろうズ」

《お知らせ》

◇巡回展開催

＊第69回新制作京都展
（絵画・彫刻・スペースデザイン）
会期　05年10月21日(金)～10月30日(日)
会場　京都市美術館

＊第69回中部新制作絵画展
会期　05年11月9日(水)～11月13日(日)
会場　愛知県美術館

＊第69回新制作絵画広島展
会期　05年11月29日(火)～12月4日(日)
会場　広島県立美術館

《伝言板》

◇絵画部協友推挙（入選15回以上）
安藤忠成（愛　知）大島伸彦（栃　木）
沢井愛子（大　阪）手嶋和子（栃　木）

◇新制作協会eメールアドレス
新制作協会事務所のeメールアドレスは以下のとおりです。ご利用下さい。
webmaster @ shinseisaku.jp

訃報

▼大里光春氏（絵画部会員）
二〇〇五年九月二十六日、逝去されました。享年八十歳。

▼脇田　和氏（絵画部会員）
二〇〇五年十一月二十七日、逝去されました。享年九十七歳。
心よりご冥福をお祈りいたします。

あとがき

▼会報は、会と出品者を繋ぐ一役割を担っています。会員からの一方通行ではなく、出品者の方々のご意見なども掲載できないものか？　私見ですが。（佐々木）

▼来年は新制作も古希。馴れ親しんだ上野での展覧会も最後の年。これから何処に向って進んでいくのだろう。（藤森）

▼『兵士へ贈る畫集』の多数の作品の写真の中から、一部を掲載しました。絵画はカラーでないのが残念です。（中野）

会報編集委員　絵画部・佐々木宗實・山口都／彫刻部・藤森民雄／SD部・中野威

（吉國写植室）